台大日本語文研究第 24 期
2012 年 12 月，頁 75-100
2012-10-20 收稿，2012-12-12 通過刊登

佐藤春夫『美麗的小城』小考
—烏托邦之相關性—

范淑文*

摘要

佐藤春夫的『美麗的小城』一作，敘述主角之一的畫家 E 君受老友之邀，參加理想的美麗小城建造計畫工程，之後老建築師 T 君也加入計畫行列。決定以東京隅田川之「中洲」這塊地作爲小城造地後，三人每天晚上聚在一起埋首於「美麗的小城」第一期工程模型的製作中。就這樣過了三年，模型製作終於接近尾聲，然而就在完成前夕，此計畫的始作俑者川崎禎藏向兩位夥伴宣稱：「我父親是個騙子，騙子的兒子也是一個騙子」，「美麗的小城」的建造根本就是一個虛擬的世界」，當他坦白事實真相後離開東京回到德國，留下畫家 E 君與老建築師 T 君茫然空虛地度日，故事也在此畫下句點。

有關「美麗的小城」日後的完成景象，計畫之主導者川崎想出各種點子讓小城日後能與外界隔絕，此外，他還對日後入住小城的居民訂了一些條件。不少學者曾提出「美麗的小城」是否算是一個烏托邦？」的質疑，本論文中分析川崎所訂的居民資格等，藉以思考『美麗的小城』中的東洋性、抑或是西洋性？進而理解『美麗的小城』的本質。

關鍵詞：「美麗的小城」、烏托邦、居民、東洋性、西洋性

* 台灣大學日本語文學系教授

An Analysis of Sato Haruo's "Utsukusi mati": Its Relation to Utopia

Fan, Shu-wen*

Abstract

Sato Haruo's "Utsukusi mati" tells the story of the main character, an artist E, who, under the invitation of an old friend, joins in the building project of the idealistic "Utsukusi mati" ("beautiful town"). Old architect T also joins the project soon after. Following their decision to make the area "Nakasu" in Tokyo's Sumida district as the site of their town, the trio gathers every night, immersing themselves in constructing the first phase of the model of "Utsukusi mati". After three years, as the model is finally approaching its completion, the mastermind of this project, Kawasaki Tizo, declares to his two companions: "My father was a liar; the son of a liar is also a liar" and that "Utsukusi mati is a fictitious world". After revealing the truth, he left Tokyo for the Germany, leaving artist E and old architect T at loss, continuing on with empty lives. Here, the story draws to a close.

The mastermind of this project, Kawazaki, envisions the "Utsukusi mati" to be a city secluded from the outside world, and he comes up with various ways to make it so. In addition, he drew up conditions for potential inhabitants of this town. Many scholars thus question: "Does Utsukusi mati count as a utopia?" In this analysis, the writer will analyze both the inhabitant conditions Kawazaki established and the characteristics of those involved in the project, and through this, examine the East and West in "Utsukushi mati" to get a fuller understanding of the nature of

* Assistant Professor, National Kaohsiung University of Hospitality And Tourism

“Utsukusi mati”.

Keywords:Utsukusi mati (beautiful town), utopia, inhabitants, the East, the West

佐藤春夫『美しい町』試論
―ユートピアの問題をめぐって―

范淑文*

要旨

理想的な美しい町を生み出すプロジェクトに画家である主人公Ｅという青年が旧友に誘われるがままに参加した。二人は、町づくりの場所として東京隅田川の「中洲」という所を考え、その後Ｔという老建築技師にも加わってもらい、三人でその第一期工事である「美しい町」の模型づくりに夜な夜な励みながら、楽しく夢を語り合った三年間を綴ったのが、佐藤春夫の『美しい町』というストーリーである。しかし、漸くその模型が完成しようとする直前に、この話を持ち込んできた川崎禎蔵は「私のおやじも山師だったが、山師の息子がまた山師なのだ」といい、最初から「美しい町」作りというのは一つの空想であったことを告白し、ドイツへ立ち去り、残された画家のＥ氏と建築技師であるＴ老人は戸惑いながらその空虚感を味わうところで物語は終っている。

「美しい町」の青写真について、町を外の世界から隔絶する工夫のほか、住居者の資格についても様々な条件をプロジェクトの主催者である川崎が下している。この「美しい町」は果たしてユートピアと見なせるかという問題はよく問われる点である。小稿では川崎が下した条件を考察しながら、佐藤春夫の『美しい町』の東洋性、

* 台湾大学日本語文学科教授

あるいは西洋性を明らかにするとともに、『美しい町』の本質を解明することを試みてみる。

キーワード：「美しい町」、ユートピア、住民、東洋性、西洋性

佐藤春夫『美しい町』試論
—ユートピアの問題をめぐって—

范淑文

一、はじめに

一九一九年八月九日に『改造』に掲載された「美しい町」が初出題で、のちに『美しき町』や「夢を築く人々」などと何回か改題[1]されているが、小稿では『美しい町』に統一する。この物語は、画家Ｅ氏という青年が旧友である川崎禎蔵に誘われて「美しい町」作りの計画に参加していた経過を「作家」である「私」を通して語ったストーリーである。この「美しい町」作りのプロジェクトには「私」である画家Ｅ青年のほか、後にＴという老建築技師も加わっている。計画の発起人である川崎の意向に従いながら、Ｅ青年は町づくりの候補地の選定や理想的な町の模様を絵に描いたりする仕事を、そしてＴ老建築技師は主に「美しい町」の模型づくりを、それぞれ担わせられ、役に励みながら、夜な夜な三人が集まっては、語り明かした三年間を綴ったものである。しかし、「美しい町」の模型が漸く完成する直前に、この話を持ち込んできた川崎禎蔵は「私のおやじも山師だったが、山師の息子がまた山師なのだ」と、「美しい町」作りという計画が最初から一つの空想だったことを告白した後、ドイツへ立ち去った。残された画家Ｅ氏と建築技師であるＴ老人は戸惑いながらその空虚感を味わうところで物語は終っている。

これまでの『美しい町』に関する研究は以下の通り、大まかに四つに分類することができる。

Ａ．ユートピア説

「理想的な街を設計しようとする」という吉田精一氏の解釈[2]以来、

---

[1] 初出題「美しい町」『改造』1919.8。単行本『美しき町』（天佑社 1920.1）で改題。その後も「夢を築く人々」（『幻燈』新潮社 1921.10）、『美しい町』（細川書店 1947.9）と二転三転している。

[2] 『春夫全集』6　解説吉田精一昭和 42 年 9 月講談社

『美しき町』がユートピア建設譚の作品とする読み方が主流になった[3]。

B．作品構造論

河村政敏氏が作品の中における二重語り手――「作家」である「私」と「作家」に話を伝える画家であるもう一人の語り手――という物語の構造に注目し、「いかにもどこかにあった事実らしく思わせ、と同時に読者の空想を刺戟しようとする」[4]と、二重語り手の効果を指摘している。一方、遠藤郁子氏も同じく二重語り手に注目しながら、「反対に、まったく「事実らしく」ない物語にすること、現実性を希薄にすることである。それによって、この作品は、現実の制約を離れた「読者の空想を刺戟」する「お伽噺」になっているのではないだろうか。」[5]と、物語の事実性を否定し、その手法によって読者の空想性を働かせる可能性を主張している。

C．時代背景の実証

『美しい町』の発表と時を同じくして、一九一九年に後藤新平を中心とする都市計画法が公布され、それに引き続き池田公爵を始め公爵たちが次々へと土地を公有地として手放したことによって、一九一〇年代の東京は急速な変貌を迎えた。中沢弥氏はそうした社会変革や当時変りつつある東京市民の生活パターンに注目し「夢のショーウィンドウを――あるいは郊外住宅の展示場！を都心につくるようなものなのだ。ここに「アルンハイムの地所」の隠れ里的なユートピアとは、異なる性格を見出すことができる。」[6]と語り、佐藤春夫の同郷者西村伊作という素人建築設計者と『美しい町』の主人

---

[3] たとえば、川端香男里「ユートピアの幻想」1993.10 講談社学術文庫／井上健―「佐藤春夫とエドカア・ポオ」1977.9『大谷女子大学紀要』／芳賀徹「春夫邸の客間の一隅で」『新潮日本文学アルバム 59　佐藤春夫』1997.9 新潮社などの研究がユートピア説につながっているとみなせよう。

[4] 河村政敏「『美しい町』試論――憂鬱の精神構造をめぐって――」『日本近代文学』1965（昭和 40）.11 pp.54-55

[5] 遠藤郁子「『美しき町』*幻想の共有」『佐藤春夫作品研究　大正期を中心として』2004.3.2 専修大学出版局 p.40

[6] 中沢弥「佐藤春夫のユートピア・ヴィジョン「美しき町」のアルケオロジー」『湘南国際女子短期大学紀要 4』1997.02 湘南国際女子短期大学 pp.23-24

公川崎との類似性を指摘している[7]。さらに、氏は画家 E 氏が司馬江漢の「三圍之景」を版画「中洲夕涼図」と取り違えて描かれていることをも実証している[8]。

一方、高橋世織氏は「『田園の憂鬱』論」という一文の中で電気の普及によって「文学青年等は夜型の生活にこの頃から入り、こうした新しい光に晒されたこの時代特有の、神経衰弱、不眠症等の精神的な近代病が瀰漫しはじめる。」[9]と、『田園の憂鬱』におけるその影響を実証しながら主人公の内面を論じているほか、「紙製のミニチュア幻想都市『美しい町』の家々にも「微細な窓」から「自家発電」による燈が洩れるようになっていた。」[10]と、『美しい町』にもそうした文明が投影していることを論証している[11]。

D．教養小説論

『美しい町』をユートピア建設譚に結びつける読み方が主流となっている上掲した現状とは一変して、海老原由香氏は「モリスの「ユートピアだより」と「美しき町」との関連性はなおさら薄いということになる。」[12]とユートピア論やモリスの「ユートピアだより」との関連性を全面的に否定し、実質的な建設譚より芸術構想であると

---

[7] 中沢弥氏は西村伊作が設計して新宮に建設した自宅を含め、伊作の理想とする住宅の理念は『美しい町』に描かれている理想的な町のそれを彷彿させていることも指摘している。その住宅は文人サロンのような存在で与謝野晶子や石井柏亭などの文人がよく出入りしていた。

[8] 中沢氏のほか、遠藤郁子氏も「明治三十年代後半は、ユートピア小説が盛んに発表された時期といえる。さらに、日本人によって書かれたユートピア小説として、一九〇二[明治 35]年の矢野龍渓『新社会』などが発表されている。（中略）明治二十年前後と、明治三十年代後半のユートピア小説の一種のブームは、社会改良の気運の高まりと呼応して盛り上がり、去っていったように見える。」と、社会の動きの反映として、ユートピア小説が一時期流行していたことに言及している。（遠藤郁子「『美しき町』*幻想の共有」『佐藤春夫作品研究　大正期を中心として』2004.3.2 専修大学出版局 pp.71-72）

[9] 高橋世織「『田園の憂鬱』論」『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』編者：佐久間保明・大橋毅彦 1992.11.5 有精堂出版株式会社 p.70

[10] 同上 p.74

[11] そのほかに、時信哲郎氏も「「佐藤春夫「美しい町」論──「かはたれ」の物語」」（信時哲郎「佐藤春夫「美しい町」論──「かはたれ」の物語」『神戸山手女子短期大学環境文化研究所紀要３』1999.03　pp.25-37 神戸山手女子短期大学）という一文の中で実証法を使って作品の中で取り扱った司馬江漢の絵と実絵とを比較しながらその差異を見出している。

[12] 海老原由香「佐藤春夫「美しき町」論序説」『駒沢女子大学　研究紀要」第五号 1998.12 p.73

主張している。さらに、「Ｅ氏はＴ老人との交流を通して、〈美しい町〉計画に携わった三年間が自分にとっては真の芸術家になるための修行時代であったことを自覚していったのであ」り、「画家Ｅ氏が私に語つた話」をＥ氏を中心化して読むと、画学生Ｅ氏が真の芸術家へと成長していく謂わば「教養小説」としての全貌が浮かび上がってくるのである。』[13]と一新した見解を示している。

ユートピア説の由来は、「美しい町」の発起人である川崎が「時々ドリイミイな目を上げてその地図の上を眺め入っていることがあった。それにまた時々彼は本を読んでいた。それはウィリアム・モリスの「何処にもない処からの便り」という本で、それを彼はよほど好きだったと見える。いつでも読んでいたから。」[14]という描写によるものであったのはいうまでもない。さらにモリスの「何処にもない処からの便り」[15]を「いつでも読んでいた」という川崎の行動からでは、「美しい町」の本質を考える際、モリスのユートピアを完全に無視するのは無理があるだろう。「真の芸術家へと成長していく」「教養小説」（反ユートピア説）という海老原氏の説には賛同しがたい。モリスのユートピアとはまったく一致していなくても、作品に盛り込んだのは何らかの意味を持っているであろう。モリスの『ユートピアだより』のほか、「美しい町」作りの発起人である川崎の身分やその動きの方向性にも興味を深く感ぜずにはいられない。

よって、小論では川崎がこだわっている「美しい町」の住居者の条件などを手がかりにしてモリスの『ユートピアだより』との相違点を考察し、「美しい町」の内質にアプローチしてみたい。と同時に、川崎のキャラクター及び彼の動きの方向性について考えながら、「美しい町」作りの背後にある川崎の意図を見出すことを試みたい。

---

[13] 海老原由香「佐藤春夫「美しき町」論――芸術家Ｅ氏の修行時代――」『東京女子大学紀要論集 50（１）1999.9.20 pp.61-62

[14] 『美しい町』pp.171-172

[15] ウィリアム・モリス（William Morris 1834-1896）の “News from Nowhere”は「無何有郷の消息」や「何処にもない処からの便り」、「ユートピアだより」など幾つかの訳文があるが、小論では以下松村達雄 訳『ユートピアだより』（1968.6.16 岩波書店）に従っている。

二、モリスの『ユートピアだより』を意識して構想された春夫の『美しい町』

さて、前述したとおりに、「それにまた時々彼は本を読んでいた。それはウィリアム・モリスの「何処にもない処からの便り」という本で、それを彼はよほど好きだったと見える。いつでも読んでいたから。」[16]と、「美しい町」作りを構想している時、川崎がモリスの『ユートピアだより』を愛読していたことが言及されている。ここでは、両者の特徴を比較してみる。川崎に制限された「美しい町」の住居者の資格について、E氏を通して次のようなことが箇条書き式に語られている。

（a）私の拵えた家に最も満足してくれる人。

（b）互いに自分たちで択び合って夫婦になった人々。そうして彼らは双方とも最初の結婚をつづけていて子供のある人たちでありたい。

（c）彼自身の最も好きな職業を自分の職業として択んだ人。そうしてそのゆえにその職業に最も熟達していてそれで身を立てている人。

（d）商人でなく、役人でなく、軍人でないこと。

（e）その町のなかで決して金銭の取引をしないという約束を守って、それのためには多少の不便をあらかじめ忍んでくれる人。

（f）そこの人たちは必ず一疋の犬を愛育すること。もし生来犬を愛しない人は猫を養うこと。犬をも猫をも嫌いな人は小鳥を飼うこと。[17]（下線引用者。以下同）

先ず、（a）に書かれている「私の拵えた家に最も満足してくれる人」というのは、つまり、価値観や芸術観や人生観などが近い人でなければ受け入れないのは改めていうまでもなく、モリスの『ユートピアだより』のみならず、古今東西を問わず、あらゆるユートピ

[16] 『美しい町』p.172
[17] 『美しき町』p.162

ア世界や桃源郷の基本条件と言えよう。

さて、(c)に定められている職業に関する規律についてであるが、ウィリアム・モリス（以下モリスと略称）の『ユートピアだより』では、「精力にあふれながらゆったりと休息するといった、わたしたちの生活、つまり、仕事が楽しみで、楽しみはまた仕事だ」[18]という点が該当するであろう。モリスの『ユートピア』では、作家や馬車の御者や船の船頭や織物工や宿主などの職業にそれぞれの住民がついていながら、季節の乾草刈りという田圃仕事にはすべての住民が参加するのである。乾草刈りを含めどの仕事をもみんなが楽しんでいる描写は、すなわち、「美しい町」の（c）の項目と重なっているのであろう。

次の（d）と（e）に盛り込まれている制限は、職業の内容についてさらに具体的に語られている。「商人でなく、役人でなく、軍人でない」と一部の職業をはっきり排除しているのは、その意図が明らかである。「軍人でない」とはつまり、戦がなく、平和であるということの保障に等しい。「役人でな」い条件は、管理されることがなく、上下関係も貴賤別もない、平等な社会であるアナーキズムを築こうとする狙いであるのは贅言するまでもない。そして、商人の排除は（e）項目の「町のなかで決して金銭の取引をしない」という項目につながるのは明白であろう。金銭による取引に至ると、自分の利益のために相手を騙したりする結果を招かざるを得ない、すなわち、「美しい町」では物々交換が進められるのである。一方、モリスのほうでは、「となり人」と呼ばれる外部から来た語り手である「わたし」は船に乗った代金や、食事代や店で気に入った商品の代金を払おうとした時、「ユートピア」の人々は戸惑いながら笑っている（というより、「わたし」が持っている金銭はその国では何の意味も持たないと思われている）ばかりではなく、「となり人」に何か役に立つことができるのを大変喜んでいるのである。無論、金銭による取引

[18] ウィリアム・モリス（William Morris 1834-1896）『ユートピアだより』松村達雄訳 1968.6.16 岩波書店 p.368

を排除するのは東洋の桃源郷にも西洋のユートピア世界にも通用するが、佐藤春夫がモリスの『ユートピアだより』を意識していたとも考えられよう。

すなわち、上掲した（a）（c）（d）（e）の四項目は、モリスの『ユートピアだより』に描かれている状況[19]と共通しているのは明らかである。その箇条書きの項目以外にも、モリスの理想と彷彿させる描写を見出すことができる。

（A）それら百の家は一切の無用を去って、しかも善美を尽くしていなければいけない。（中略）不必要な贅沢のなかに美があると思うのは、現代のより大きな誤謬に原づくところのより小さな――しかし、やはりなかなか大きな誤謬である。（中略）一つの家は、二階家で三十坪よりあまり以上の土地は費やしたくない、――それ以上の屋敷を要する人はここの町の住民でないように。とも彼は言った[20]。

（B）この部屋もこの家の他の部屋と同じく何の飾り気もなく、必要な家具が少しばかりあるだけだ。その家具も非常に簡素で粗々しい趣きさえあるが、しかし堅牢で彫刻がたくさん施されている[21]。

（A）は佐藤春夫『美しい町』の一節であり、「一切の無用を去」るや「三十坪よりあまり以上の土地は費やしたくない」という条件は（B）に挙げているモリスの『ユートピアだより』にある描写と相通じており、必要以上の贅沢を拒否しているのである。おそらく、世の中の特権者を批判すると共にすべての住民の平等を主張している示唆として捉えられよう。

---

19 『ユートピアだより』の訳者松村達雄氏は、「それは、貧富の差別なく、主従の差別なく、怠惰もなければ過労もなく、偏った知的労働者も偏った肉体労働者もない、社会状態である。各人が、個人を傷つけることは万人を傷つけることだと十二分に意識して、浪費的にならないように事を処理してゆく、万人が平等の条件下に生活するような社会である。」とモリスのユートピア世界をまとめている。（ウィリアム・モリス『ユートピアだより』松村達雄訳 1968.6.16 岩波書店 p.382）

20 『美しい町』pp.161.171

21 モリス『ユートピアだより』p.99

これほど類似点が挙げられる以上、モリスの『ユートピアだより』を意識しながら「美しい町」作りの構想がなされていると見なしても差支えがなかろう。とはいうものの、異なる点も見落とすことはできない。

モリスの『ユートピアだより』では、「あなたのさっきからのお話では、どう見たって人好きしない人たちの国々をね。不幸な人たちの中に住んでいると、人は早く老けるものだとよく言われています」[22]にあるように、旅人である「わたし」の実際年齢より老けて見えるのは「不幸な」国で生活している点に理由があると帰されている。そして二十歳にしか見えない彼女に実際は四十二歳だと告げられた時、「わたし」は驚いた。つまり、モリスのユートピアには、現実につながる未来の理想図に不老長寿という仙人譚めいた虚構性も織り込まれているのである。一方、この未来の理想的な世界で過ごしている間案内役を務めていた美青年ディックは、その昔恋人であるクララと彼女がほかの男に惑わされたことが原因で一度別れたことがある。理想郷の一般的な概念と矛盾しているのは明らかであるが、それは個の自由への尊重としか捉えようがない。

さて、この結婚に関する考え方であるが、「美しい町」ではモリスのユートピアとは異なっている。それは（b）に挙げている項目ではっきりと示されている。「互いに自分たちで択び合って夫婦になった人々。そうして彼らは双方とも最初の結婚をつづけていて子供のある人たちでありたい。」という規律はモリスの状況に比べ、却って理想郷に近いと言わざるをえない。東洋の理想郷といえば、誰しもが陶淵明の「桃源郷」を思い浮かべるであろう。陶淵明の「桃源郷」には男性も女性も、そして子供も老人も登場している。こうした設定は、子孫繁栄に結婚の意義があるという古くからの考え方の印として捉えられるが、その結婚は自由恋愛によるものかなどのイデオロギーは触れられてはいない。というより東洋の伝統からでは自由恋愛が考慮されなかったのは寧ろ自然であろう。日本においても女

[22] モリス『ユートピアだより』p.34

性が自分の意志による結婚は明治時代後半に入ってからようやく認められるようになったが、極めて時代の先端に立っている一部の女性に限られていたのは一般的な認識である。そのような封建制度がまだ完全に崩されなかった当時の社会のもとで、「自分たちで択び合って」結ばれた夫婦という住居の資格を川崎が下したのは、自由恋愛や結婚の自由などが社会の主流となっていた西洋の制度に見習おうという意図だったとみなせよう。と同時に、「最初の結婚」――つまり離婚しない――夫婦や「子供のある」夫婦と強調しているのは、夫婦とも白髪や子孫の繁栄などを重視する東洋的な倫理観を忘れてはなるまいと語り手が示唆しているともうかがえよう。

こうした西洋と東洋の折衷以外に、近代と反近代の矛盾している発想を見出すこともできる。「美しい町」の構想について、川崎は(e)項目の「金銭の取引をしない」という制限を述べた後、不思議に「そうしてその町の外に、別にその町の人たちのために金銭の受け渡しをする場所をも設けるはずである」という但し書きを付け加えている。この点について遠藤郁子氏はモリスの『何処にもない処からの便り』に描かれている「共産主義的な未来社会」と比較しながら、「このように考えると、完全に独立した理想社会を描いたユートピア小説である“News from Nowhere”と同じように、『美しき町』という作品を読むことはできないかもしれない。」[23]と、川崎によって様々な条件が下された「美しい町」の独立性や理想性を疑う見解を示している。「美しい町」内では、敷地と選定される中洲を「他の部分を区別するためにその中間に約幅五間のやや深い渠溝を設け」、「商人でない」住民たちが互に物々交換で生活していくと定めた以上、煩いや不幸の外界と一線を画そうとする意図――東洋の桃源郷や西洋のユートピア世界の基本条件を設ける企て――があったのは明らかである。のみならず、「他の町の電燈会社から電燈を引き込むということには満足し」ない川崎は、「自分たちの電燈を自分たちの

[23] 遠藤郁子「『美しき町』*幻想の共有」『佐藤春夫作品研究　大正期を中心として』2004.3.2 専修大学出版局、p.65

簡易な機械で灯す」と、外界との隔絶を徹底化している。しかしながら、近代化のシンボルである電灯の供給は外界との隔絶という反近代とは矛盾している[24]。高橋世織氏は、「この光は電燈株式会社から一方的に供給される商品であり（「美しい町」（大 8）では、自家発電による燈火が考えられた。）大衆消費社会の形成もあいまって、様々な欲望を刺激し（その結果、映画し、幻燈等の光学芸術を産むが)、多くの家庭が〈団欒〉し、生活時間帯は勢い夜間にずれ込むようになる。文学青年等は夜型の生活にこの頃から入り、こうした新しい光に晒されたこの時代特有の、神経衰弱、不眠症等の精神的な近代病が瀰漫しはじめる。」[25]にあるように、家庭の〈団欒〉を促すような貢献的な面もあれば、「夜型の生活」に変ったことによる「神経衰弱、不眠症等の精神的な近代病」というマイナス的な結果をももたらしていると佐藤春夫文学に登場している電灯の意義を捉えている。『田園の憂鬱』においては、「神経衰弱、不眠症」で悩まされている主人公がその典型であるが、『美しい町』ではそのような破壊的なイメージとして電灯が盛り込まれているとは思えない。次の描写に注目したい。

> その卓上の紙の「美しい町」には、その家のなかにはそれぞれに一つ一つのかすかな光があって、それがそれらの最も些細な窓から漏れ出して、われわれの目の下には世にも小さな夜の街が現出していた[26]。

「美しい町」の模型の製作中、それぞれの家に窓が設けられ、それらの窓から光が「漏れ出し」、美しい「夜の街」に変身することに川崎が大変こだわっている。光が「窓から漏れ出」すことやその風景は温かい家庭、一家団欒する幸せな時間[27]につながるであろう。

---

[24] モリスの『ユートピアだより』の世界では電気が引き込まれず、日が暮れたら休み、日が昇ると一日が始まり、すべての人間が働きはじめる、という反近代化の生活が営まれている。

[25] 高橋世織「『田園の憂鬱』論」『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』編者：佐久間保明・大橋毅彦 1992.11.5 有精堂出版株式会社 p.70

[26] 『美しい町』p.174

[27] 高橋氏は、また「美しい町」の窓を、「<窓>こそは採光口であり、明暗の支

模型にとどまらず、実際には「美しい町」の模型作りに励む三人が集まる時間が「夜七時半から十一時半まで」であり、夢中になって十二時過ぎることもよくあると語られている。「われわれはそんな風にして仕事をつづけた。われわれはいつも忙しかった。そうしていつも楽しかった。」と、夜集まっている三人の姿が描かれている。この男三人の光景は一つの家庭とはいえないまでも、「美しい町」の模型作りに夢中になっている川崎、画家である青年E氏及び老建築技師T氏が、毎晩一室に集まって電気の下で楽しく過ごしている様子は、正に温かい夜の一時を楽しむ社会の縮図そのものではなかろうか。すなわち、金銭による取引行為――資本主義の元凶――という近代化を拒む一方、近代化の象徴でもある電気が住民の生活に温かみをもたらしていると『美しい町』でその恩恵を讃えている語り手の姿勢が強く感じられる。このように近代化を全面的に批判しているのではなく、近代と反近代が同時に『美しい町』に見出すことができるのである。

金銭による取引行為への批判さえも実は中途半端であり、矛盾している。「その町の外に、別にその町の人たちのために金銭の受け渡しをする場所をも設けるはずである」という一節によって、金銭による取引への拒みは「美しい町」の枠内にとどまり、徹底化されていない。のみならず、上掲した遠藤氏の指摘の通りにそれによって「周囲を堅固な石垣で積み固められ」ている「いわば一つの城郭のような」「美しい町」の独立性も崩れている。この矛盾は最初から存在し、「美しい町」作りに付き纏っていることを語り手は百も承知しているのである。外界との隔絶を憧れながら、「私はそれがどんな形でも時代が後がえりするということは喜ばない」という、川崎のポリシーに背くことができないからである。そこには、「その美しい町というのはどこか東京の市中になくてはいけないのだ」という川崎

点であり、内界と外界との境、通路であり、瞳にも当るものだろう。」とあるように、「外界との境、通路」と捉えている。（高橋世織「『田園の憂鬱』論」『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』編者：佐久間保明・大橋毅彦 1992.11.5 有精堂出版株式会社 p.74）

の言葉の通り、都会の近代化――経済力を都会に頼らざるを得ない時代性――に背を向けられない、川崎の一種の無力感や寂寥感も感じ取れるだろう。

さて、最後の（f）の項目は如何なる条件であろうか。「そこの人たちは必ず一疋の犬を愛育すること。もし生来犬を愛しない人は猫を養うこと。犬をも猫をも嫌いな人は小鳥を飼うこと」という住民のライフスタイルは、都会から郊外に移って生活する『田園の憂鬱』の主人公を容易に思い浮かべるだろう。都会の生活に厭きた主人公が妻及び荷物搬びの雇い女に伴われるほか、猫と二匹の犬を連れて郊外の一角に住処を定め、自然との対話を味わうというストーリーである。東洋の理想郷である陶淵明の「桃源郷」における動物といえば、外地からの客を見たら犬が主に知らせるか歓迎するしるしとして吠えたり、そして客の持て成しに村の人たちが鶏を用意したりする、つまり、犬や鶏などの動物は言わば、生計を立てる目的として盛り込まれ、一種の裕福と見なす事ができるのである。陶淵明の「桃源郷」に織り込まれている犬や鶏などの動物と、『田園の憂鬱』における犬や猫、または『美しい町』に盛り込まれる犬や猫、鳥などとは、その目的やシンボルが異なっているのは明らかであろう。『田園の憂鬱』にも、『美しい町』にも、猫、犬、或いは鳥、いずれも住民の生計にかかわっていると思われる描写は見当たらない。『田園の憂鬱』では、都会の煩いで郊外に移った主人公は隣家との付き合いのみならず、妻とのコミュニケーションも円滑に進まないことで時々苦しんでいるが、散歩に犬を連れて行き、犬のために蝗を一生懸命に取ろうとしたり、猫や犬が近所に迷惑をかけた場合でも、部屋を汚したりしても叱らず、可愛がったりしている。つまり、人間との付き合いが苦手な主人公にとっては、犬や猫が孤独で荒んでいる彼の心の慰めと考えられているのではなかろうか。妻との会話は円滑ではないが、犬と野原を散歩している時や夜中犬の安否を心配している主人公は生き生きしているし、ペットへの愛情が感じられるのである。『美しい町』で、そのような役割りの犬や猫、或いは鳥などのペットを再び登場させるのであろう。その「美しい町」の住民として

必ず飼わなければならない犬や猫、あるいは鳥などのペットは、住民の精神の安定剤や慰めとして、その幸せな世界を構築していく任務が付与されているのである。こうした設定から考えれば、明るく振舞っている「美しい町」の発起人である川崎はどこか『田園の憂鬱』の主人公と重なっている内面を持っていると考えてもよかろう。

三、アメリカ人である川崎が「美しい町」作りを何故東京に求めたのか

川崎に定められた「美しい町」の住民の資格以外に、川崎がなぜアメリカから日本に渡ってきて、東京の一角に「美しい町」を作ろうと考えたのか、というのも作品『美しい町』の本質に迫る有効な視座と考えられる。アメリカから日本へという移動は意味深い。

「美しい町」作りの発起人である川崎禎蔵は、「東洋に多くの取引き先をもった」父親が東京に来た時に知り合った日本の女性との間で生れた「混血児」で、十六歳まで日本で過ごしていたが、「母が亡くなってから父に引き取られて彼の父の国へ、アメリカへ、帰化したのだ。」[28]と語られている。帰化した名前は「テオドオル・ブレンタノ」であるが、幼少時代の友人で画家のＥと再会し、自分の夢を語りはじめた時点から、日本を去っていくまで「川崎禎蔵」という日本名でＥ氏に語られている。Ｅ氏にとっては、「テオドオル・ブレンタノ」という帰化したアメリカの名前はなんの意味も持っていない一方、昔一緒に過ごしていた少年時代の「川崎禎蔵」という名前が二人の共通の思い出のシンボルと思われるからである。言い換えれば、「美しい町」作りの夢を抱えて旧友に会いに来た川崎は自分のアイデンティティのルーツが日本であり、「美しい町」作りの期間中は日本人として過ごそうと強く意識していたという示唆だったのではなかろうか。

アメリカに帰化した「テオドオル・ブレンタノ」は父親の国であるアメリカで「美しい町」を企てようと思えば出来ないことはなか

[28] 『美しい町』p.160

ったのだろうが、遥々と海を渡って日本まで「美しい町」作りの夢の実現を求めてやって来た。それは、母親の古里、否、正確に言えば自分が生まれ育った故郷が恋しく、幼少時代に友人と過ごしていた土地を偲びたい心境の駆使でわざわざ日本に戻ってきたのであろう。ここでは『都会の憂鬱』の主人公の心境を連想せずにはいられない。「帰れる放蕩息子」に自分自身をたとえた彼は、「息苦しい都会の真中にあって、柔かに優しいそれゆえに平凡な自然のなかへ、溶け込んでしまいたいという切願を、かなり久しい以前から持つようになっていた。おお！そこにはクラシックのような平静な幸福と喜びとが、人を待っているに違いない。」[29]という一節である。青年になった川崎はアメリカではどんな生活をしていたかは言及されてはいないが、「美しい町」造りの計画が最初から実現できない夢であったことを告白した後、アメリカではなく、ドイツに去ってしまったという設定から見て、アメリカでの生活は愉快だったとは決して言えないのであろう。上掲の『都会の憂鬱』に描かれているような「放蕩息子」ではないが、「異郷」であるアメリカでの精神のさすらいを体験した川崎は生まれ育った土地の空気が恋しく、母親のような存在の優しい故郷である日本――彼にとっては「柔かに優しい」「平凡な自然」――に暫しの「平静な幸福と喜び」を味わいたかったのである。そして、画家であるＥ氏及び老建築技師であるＴ氏と三人でホテルの一室に集まっている期間中、「私は、その『美しい町』について計画するある時だけ――それもやはり夜であるが――私は、無限の富限（ママ）者であった。」[30]と、川崎が最高の幸せのように自分の心境を述べている。形は異なるであろうが、「美しい町」作りに夢中になっている川崎は、芸術観が相通じているＥ氏とＴ氏と一緒に、誰にも邪魔されない夜の一室――そこが正に「美しい町」である「一つの城郭のような」隔絶された空間――さらにＥ氏という旧友の存在によってその空間には懐かしい故郷の匂いが漂い、『田園の憂鬱』

[29] 『田園の憂鬱』p.55
[30] 『美しい町』p.180

の主人公が郊外に向う途中の「世紀からは置きっ放しにされ、世界からは忘れられ、文明からは押し流されて、しょんぼりと置かれているのであった。」という、放心状態になり、至福の時間を享受できたのである。つまり、川崎は「美しい町」作りの計画に携わっているのではなく、「美しい町」というユートピア同然のような空間と時間に身を浸していたのである。西洋であるアメリカから日本に渡ってきた川崎にとってはこの「美しい町」は一種の東洋的なノスタルジアであり、それを満喫したあと現実の世界に目覚め、自分が属すべきドイツに向わざるを得なかったのである。

四、結び

ユートピア小説が一つのブームになっていた時期に創作した佐藤春夫の『美しい町』には、ユートピア要素や憧憬がないとは言いがたい。上記の考察から、『美しい町』の本質の理解として、作品に潜んでいる東洋と西洋の問題を以下のようにまとめることができる。

（一）アンビバレンスを露呈している「美しい町」

「中洲の他の部分を区別するためにその中間に約幅五間のやや深い渠溝を設け」、「周囲を堅固な石垣で積み固められ」ている「いわば一つの城郭のような」「美しい町」は、外界から隔絶される“小宇宙”として成立ち、外界と一線を画す理想郷やユートピア作りの基本条件に見事に符合しているのは贅言するまでもない。のみならず、川崎、画家であるＥ氏及び建築老技師であるＴ氏との三人によって取り組まれる「美しい町」では、金銭による取引の代りに物々交換が進められる、一種の“自給自足”のライフスタイルが語られ、「商人でなく、役人でなく、軍人でない」という職業に関する規定も付け加えられている。「商人」、「役人」及び「軍人」が存在しないことによってこの“小宇宙”では騙されることがないし、管理役もなく管理されることも許されず、そして戦もない、という平和極まり無い“ユートピア”のモデルを、都会の人々――近代化社会の人々――に見てほしい、という語り手の理想や願望がうかがえる。「ユートピア思想

においては、その根底にあるのは、理想社会を実現しようとする主体的な意志である。それに対して桃源郷が示しているのは、理想社会の実現をあきらめる、というメッセージであろう。」[31]という伊藤直哉氏の見解に基づいて考えれば、理想社会の輪郭を描きながら都会や近代化という現実を抹消せず、より現実的な姿勢を構えた川崎によって語られた「美しい町」は、桃源郷よりユートピアの内質に近いと見なすべきであろう。言い換えれば、「美しい町」の基盤は、現実社会から離れた虚無的な東洋性より、現実社会を前向きに見詰める西洋性に傾いていると言えよう。否、夢か現実なのか、朦朧たる雰囲気のなかで理想社会に誘導されてしまうモリスのユートピアに比べ、「美しい町」は、「約幅五間のやや深い渠溝」や「堅固な石垣」によって“小宇宙”の空間の独立性が成立ち、理想が保たれる一方、その「やや深い渠溝」を越えたら非理想社会にかかわることができ、正に現実社会で実現される理想社会と称すべきであろう。

また、「一疋の犬を愛育すること。もし生来犬を愛しない人は猫を養うこと。犬をも猫をも嫌いな人は小鳥を飼うこと」という「美しい町」の住民資格への規定は、『田園の憂鬱』の主人公の状況を思い浮かべずにはいられない。原仁司氏は「春夫の芸術的感性は、一国の文明がもつ過去の<歴史>や<伝統>への血脈を求めるとともに、未来へ切り開き突き進まねばならぬ<社会>や<他者>との関係の、その双方を視野に納めながら、それらを綜合しようとする姿勢を保持しつづけた。」[32]と、〈社会〉や〈他者〉との関係が春夫にとって最も関心を抱いていた問題だという見解を示している。こうした春夫の関心が『田園の憂鬱』の創作期に顕著に現われているのは言うまでもない[33]。社会や他者との関係で悩んでいる『田園の憂鬱』の主人公は

---

[31] 伊藤直哉『桃源郷とユートピア―陶淵明の文学』2010.3.31 春風社 p.153

[32] 原仁司「佐藤春夫における絵画と自我の問題――「田園の憂鬱」成立の前景――」『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』編者：佐久間保明・大橋毅彦 1992.11.5 有精堂出版株式会社 p.66

[33] 中村光夫氏は「「田園の憂鬱」の全篇は、ただ主人公の「彼」の獨白に終始します。あるひは彼と自然との對話といつてもよいかも知れません。（中略）自然との「主觀的」對話に盛られたイメージの豊富さも、平凡な田舎の季節

心の安らぎの場を郊外へ求めに赴いたが、その土地の人々の世界にも馴染めず、犬や猫などのペットとの会話に頼る羽目になってしまったのである。『美しい町』で「美しい町」の住民にペットを飼わせることは、つまり『田園の憂鬱』の主人公のそれを彷彿させ、一種の他者との関係の代行として位置づけられていると捉えられよう。「互いに自分たちで択び合って夫婦になった人々」という条件と共に、ペットを飼わせる条件も個への眼差しの具現であろう。「商人でなく、役人でなく、軍人でない」という近代化への批判を見せながら、徹底的な個への尊重――近代化社会の現実――に背を向けない、という姿勢は「美しい町」で露呈しているアンビバレンスであろう。

（二）『美しい町』にみる東洋的なノスタルジア

タイムスリップのメカニズムで理想郷に身を浸すことが成立つ点で、東洋的な桃源郷と西洋的であるモリスのユートピアが共通している。佐藤春夫の『美しい町』では、「美しい町」という夢を抱え、その実行の場を主人公である川崎禎蔵が東京に――船という乗り物で広い海を渡って東京に――求めに来た。つまり、従来の朦朧たる空間の代りに、明白な空間の移動を経て、主人公である川崎が日本、そして大都会である東京の一角で芸術観の通じ合うＥ氏とＴ氏と三人で、理想郷作り――夢を語るプロセス――に暫し身を浸していたのである。川崎にとっては、アメリカではなく、日本へ――国から国へ――という巨大な空間の移動が一種の夢の実現である。「美しい町」作りの夢を抱えながら旧友Ｅ氏に会いに来た川崎は「美しい町」作りの期間中、日本人として過ごそうと強く意識しており、自分のアイデンティティーのルーツを日本で確認したに違いない。となれば、アメリカから母親の古里、というよりＥ氏と楽しく幼年時代を過ごしていた懐かしき「自分」の古里にその理想郷を求めにきたの

の推移を、交響樂に似た効果で、詩化してゐます。」（中村光夫「田園の憂鬱」『近代作家研究叢書　81　佐藤春夫論』監修・吉田精一 1990.1.25 株式会社日本図書センターp.37）と語り、全篇のモチーフを自然とのかかわりと見なしているが、社会や他者との関係の躓きが原因でそこを離れて「自然との對話」に心の安らぎを求めようと企てたが、他者とのかかわりを完全に断ち切れないことを「彼」は十分に承知していたのであろう。

は一種のノスタルジアの具現といえよう。川崎は「美しい町」作りの計画に携わっているのではなく、「美しい町」というユートピア同質のような空間と時間に身を浸していたのである。猪野謙二氏は「若年のかれの才能が、当時めぐりあった西欧世紀末文学の「倦怠」や「幻想」を媒介として、ここに早くもその東洋的な文人隠者風の姿勢をわがものにしていることはあきらかである。すなわちかれは、（中略）東洋的な文人趣味の再発見と結びつけることによって、明治末年以降の青春の危機を乗り切ったのである。」[34]と佐藤春夫の東洋的な文人隠者性癖に言及している。『美しい町』における主人公川崎の、西洋であるアメリカから日本へという移動の方向性を考えれば、川崎が身を浸す理想郷は猪野氏の所謂「東洋的な文人趣味」と見なすことができ、彼が考えていた理想郷には一種の東洋的なノスタルジアが漂っているのであろう。実際に、「美しい町」の住民資格の一つである「最初の結婚」――つまり離婚しない――夫婦や「子供のある」夫婦と強調しているのは、夫婦とも白髪や子孫の繁栄などを重視する東洋的な倫理観の主張ではなかろうか。

しかしながら、「『安住の地』のないところが春夫の『安住の地』」[35]という藤田修一氏の指摘が『美しい町』にもぴったりと当て嵌まり、川崎が享受していた東洋的な雰囲気の理想郷は長く続かない。「美しい町」を建築する資金など全然有していない現実に目が覚めた「テオドオル・ブレンタノ」（川崎）は、日本は所詮“他所の土地”であることに気付き、そこを離れ、父親の親戚のいるドイツへ赴かざるを得なくなったのである。つまり、東洋的なノスタルジアを味わった日本という“他所の土地”は、あくまでも桃源郷と同じく、東洋的なノスタルジアの束の間の享受の場でしかなく、暫しの安堵感を満喫した後、彼は、近代化した、西洋的な現実社会に再び戻らなくてはならないのである。

---

[34] 猪野謙二「佐藤春夫の一側面―その「国士」から「隠者」への道―」『明治の作家』1966.11.30 岩波書店 pp.553-554

[35] 藤田修一『「田園の憂鬱」論大正期の感性―』昭和 63（1988）5.23 曜曜社出版株式会社 p.123

テキスト

『美しい町』『田園の憂鬱』は『日本の文学 31　佐藤春夫』昭和 41（1966）年.8.5 中央公論社によるものである。

参考文献

猪野謙二（1966.11.30）「佐藤春夫の一側面―その「国士」から「隠者」への道―」『明治の作家』岩波書店

井上健（1977.9）「佐藤春夫とエドカア・ポオ」『大谷女子大学紀要』

伊藤直哉（2010.3.31）『桃源郷とユートピア―陶淵明の文学』春風社

ウィリアム・モリス（William Morris1834-1896）著・松村達雄訳（1968.6.16）『ユートピアだより』岩波書店

海老原由香（1998.12）「佐藤春夫「美しき町」論序説」『駒沢女子大学研究紀要」第五号

海老原由香（1999.9.20）「佐藤春夫「美しき町」論――芸術家 E 氏の修行時代――」『東京女子大学紀要論集 50（１）

遠藤郁子（2004.3.2）「『美しき町』*幻想の共有」『佐藤春夫作品研究　大正期を中心として』専修大学出版局

川端香男里（1993.10）「ユートピアの幻想」講談社学術文庫

河村政敏（1965.11）「『美しい町』試論――憂鬱の精神構造をめぐって――」『日本近代文学』

信時哲郎（1999.3）「佐藤春夫「美しい町」論―「かはたれ」の物語」『神戸山手女子短期大学環境文化研究所紀要３』神戸山手女子短期大学

高橋世織（1992.11.5）「『田園の憂鬱』論」佐久間保明・大橋毅彦編『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』有精堂出版株式会社

中沢弥（1997.02）「佐藤春夫のユートピア・ヴィジョン「美しき町」のアルケオロジー」『湘南国際女子短期大学紀要 4』湘南国際女子短期大学

中村光夫（1990.1.25）「田園の憂鬱」吉田精一監修『近代作家研究叢書　81　佐藤春夫論』株式会社日本図書センター

芳賀徹（1997.9）「春夫邸の客間の一隅で」『新潮日本文学アルバム 59　佐藤春夫』新潮社

原仁司（1992.11.5）「佐藤春夫における絵画と自我の問題――「田園の憂鬱」成立の前景――」佐久間保明・大橋毅彦編『日本文学研究資料新集 23 佐藤春夫と室生犀星』有精堂出版株式会社

藤田修一（1988.5.23）『「田園の憂鬱」論―大正期の感性―』曜曜社出版株式会社